

アメリカの貿易における「二重構造」の形成について

中 西 弘 次

I ここでわれわれが問題とするアメリカの商品貿易における「二重構造」とは、アメリカの商品貿易構成における特徴的な性格、即ち西欧・日本等の先進工業諸国にたいする食糧品・原料輸出=工業製品輸入(後進国型貿易構造)と、中南米・アジアの後進諸国にたいする工業製品輸出=食糧品・原料輸入(先進国型貿易構造)の二重的性格の存在ということである。このような「二重構造」をもつアメリカの貿易が、第2次世界大戦後の世界の貿易において支配的地位をしめたことからして、アメリカは、戦後の国際分業上において一定のかく乱的要因として作用して来た¹⁾。また、この「二重構造」は、最近のアメリカの貿易・国際収支問題においても、その基礎によこたわる問題として重大な意義を有している²⁾。

このような「二重構造」が、アメリカの商品貿易において本格的に形成されて来るのは、アメリカがイギリスを追い抜いて世界第一の工業生産国になり、他方、国内においては、ようやくフロンティアが消滅して、国内市場の拡大が停滞化しはじめる時点——1880年代においてである³⁾。一般的にいえば、アメリカ貿易の「二重構造」なるものは、アメリカが植民地時代以来のヨーロッパへの食糧品輸出=工業製品輸入という貿易構造を帝国主義段階にいたっても払拭しえないということと、他方イギリスにおくれて資本主義的發展をとげたアメリカの工業は、その外国市場をより後進的な地域に求めざるを得なかったということから生じたのである。これらのこと、即ち、アメリカ資本主義の「後進性」と、豊富な国内資源を背景とするアメリカ資本主義の「自己完結性」とが、アメリカの貿易における「二重構造」成形の基本的要因であるといいうる⁴⁾。

本稿においてあきらかにしようとすることは、この

1) 木下・山本・内田・奥村『世界の貿易』(三一書房「戦後世界の政治と経済」7)序章、第1章参照。

2) 1958年をさかいとして世界経済にたいするアメリカの絶対的優位は、戦後の異常な貿易構成が戦前型へ復帰してゆく過程とともに動揺しはじめた。この点は、田口陽一「アメリカの国際収支危機の背景」竜谷大学経済論集第4巻1号30-31頁参照。

3) 吉村正晴『貿易問題』(岩波全書)148頁参照。

4) 木下他前掲書33頁、片山・狭間『自由化とブロック化』(河出書房「現代の経済2」)154-156頁参照。

「二重構造」なるものが、初発的に形成された時点を確認することである。植民地時代—建国期の農産物輸出=工業製品輸入という完全な形での後進国型貿易構造に加えて、工業製品輸出=農産物輸入という、もう1つ別の性格の貿易構造が、どの時点において、どのような内容をもって、アメリカの商品貿易構造のなかにあらわれたかということの確認である。これらのことがあきらかにされることによって、たんに、アメリカの貿易構造の究明ということにとどまらず、さらにそのような貿易構造をささえた内実があきらかにされ、その結果、外国貿易というきわめて間接的な視点からではあれ、アメリカにおける産業資本成立についての1つの接近がなされる。

II 19世紀末にいたってもなおアメリカの商品貿易構造は、全体としては農産物輸出=工業製品輸入という性格から脱しえなかった⁵⁾。まして19世紀前半—南北戦争前のアメリカの貿易においては、まさに「綿花は王者」であった。したがって、「二重構造」形成という問題の端緒は、アメリカの商品輸出貿易において、どの時点でアメリカ製の工業製品が、いわゆる各種の製造工業品 *manufactured goods* の輸出中において主要なものとなったかという点、さらには、その輸出先国はどこであったかという点、等にある。

従来、アメリカの経済史家あるいは貿易史研究者には、この「二重構造」の形成ということについての明確な指摘・分析はみられない⁶⁾。ただ、G. R. Taylor教授は、次表をあげて、次のような事実を指摘している⁷⁾。

(1) 1816年から1860年までの間、輸出品目の首位は、絶対的にも相対的にも原綿が占めているが、それにたいしアメリカ製の工業製品輸出額は、その拡大率では、原綿をも超過した(当初、輸出総額の7%から12%へ。8倍に増大。原綿は当初、39%から54%へ)⁸⁾。

5) 吉村前掲書148頁。宇治田・神野『アメリカ資本主義の生成と発展』124頁参照。

6) E. R. Johnson and others, *History of Domestic and Foreign Commerce*; C. M. Depew, *One Hundred Years of American Commerce*; J. H. Frederick, *The Development of American Commerce* 等参照。

7) G. R. Taylor, *The Transportation Revolution*, pp. 187-190. 8) *ibid*, p. 451.

第1表 国内製工業品輸出額(単位=百万ドル)

年次 順位	1820	1830	1840	1850	1860
1	化学製品等 ¹⁾ 1.0	綿製品 1.3	綿製品 3.5	綿製品 4.7	綿製品 10.9
2	石けん 0.8	化学製品等 1.2	精糖 1.2	木製品 ²⁾ 2.0	鉄・鋼 5.9
3	酒類 0.5	石けん 0.6	鉄・鋼 1.1	鉄・鋼 2.0	タバコ 3.4
4	ろうそく 0.3	皮革製品 0.4	タバコ 0.8	化学製品等 0.9	木製品 ²⁾ 2.7
5	皮革製品 0.2	鉄・鋼 0.3	化学製品等 0.7	石けん 0.7	化学製品等 1.9
6	木製品 ²⁾ 0.2	酒類 0.3	木製品 0.6	タバコ 0.6	銅・青銅 1.7
7	木製品 ³⁾ 0.2	ろうそく 0.2	石けん 0.5	酒類 0.3	皮革製品 1.5
8	タバコ 0.1	タバコ 0.2	酒類 0.4	精糖 0.3	酒類 1.5

出所: G. R. Taylor, *The Transportation Revolution*, p. 189.

注: 1) この品目のうち 90% は, pot and pearl ashes からなる。2) 家具を含まないもの。3) 家具。

(2) 1820年-1860年の間に、輸出製造工業品中、綿製品が首位にたったのは 1830 年であり、爾後、次第に銅鉄・の比重が増大している。

(3) 綿製品の主要輸出先は、30 年代はメキシコであり、40 年代以後は中国である。その他南米諸国、西インド諸島、カナダ、さらにはアフリカおよび東インドにも輸出された。

(3) 灰類、石けん、酒類等は、主として農業における副産物であり、それらは、ヨーロッパに輸出された。

輸出総額中にしめる製造工業品額の比重は 1816 年 7%、1860 年 12% ときわめて低いものではあったが、Taylor 教授の表にみられるように、1830 年という時点からは、各種の輸出製造工業品(植民地時代以来の pearl and pot ashes や tallow candles, spirits 等々)の首位に近代工業成立の波頭となった綿工業の製品が出て来たのである。しかし、Taylor 教授の表は、各 10 年ごとのものである。ここにあらわれてくる 1830 年という時点は、実は、それに先行する 1820 年代における事態の進行⁹⁾を表現しているものである。すでに 1827 年には同様の事実が確認される¹⁰⁾。1827 年から 1833 年までのアメリカ製製造工業品の輸出額順位を、前掲 Taylor 教

授の表にならって算出すれば、第 2 表の通りである。各年次とも、綿製品が 20% 台から次第に 40% 台に近づきながら首位にあり、さらには、鉄鋼製品が次第にその比重を増してきている。ところで、この綿製品の内訳は、第 3 表の表にみられるように、その圧倒的部分が、未染色の「白布」(White) (粗製綿布)である。

これらの粗製綿布は、Taylor 教授、V. S. Clark も指摘している¹¹⁾ように、主として、中南米諸国、中国、等のより後進的な地域にたいして輸出された。たとえば、1833 年の輸出額 2,532,517 ドルのうち、900,000 ドル以上がメキシコに、約 213,000 ドルが中国に、約 36,000 ドルが東インドに、のこりは主として、中米共和国¹²⁾、コロンビヤ、ブラジル、プエノス・アイレス、チリーに輸出された¹³⁾。これにたいして植民地時代以来アメリカにとっての重要な輸出市場ではあったが、その貿易が基本的には各母国であるヨーロッパ諸国に把握されていた西インドにたいする製造工業品輸出は、たとえば 1830 年の対キューバにみられるように、次のようなものであった。総額 835,084 ドル、その内容は、家具 58,673 ドル。馬車その他の車 16,945 ドル。帽子 182,216 ドル。くら 21,916 ドル。ガラス 20,688 ドル。火薬 62,722 ドル。くし・ボタン類 33,738 ドル。皮革製品(長靴、短靴等) 157,738 ドル。石けん、獣脂ろうそく 217,990 ドル。鯨ろう 362,413 ドル¹⁴⁾。これらはいずれも製造工業品 manufactured goods であるとはいえ、綿製品がそうであるような近代工業=機械制大工業の生産物ではない。

III 1793 年ヨーロッパにおける戦乱の開始から 1807 年末の Embargo Act にいたる期間は、アメリカの貿易

9) 1820 年代が、アメリカの綿業における工場制度の発展にとって画期的な時代であることは、すでに各研究者によって指摘されているところである。1812 年戦争後の輸入激増による打撃の後、力織機 (Power loom) を導入したアメリカの綿業が、いわゆる「ウォルサム型」工場の出現によって、ニュー・イングランド、中部諸州においては、農村家内工業を没落せしめつつ、急速に発展していったのが、この 1820 年代から 30 年代にかけてであった。宮野啓二「農村家内工業の没落について」『経済研究』第 16 巻第 1 号 65 頁参照。なお、「アメリカの綿製品は、力織機の導入後まもなく外国市場にあらわれた。」V. S. Clark, *History of Manufactures in the United States*. Vol. I, p. 362.

10) 綿製品の輸出開始について、V. S. Clark も同様に 1827 年という年をあげている。ibid., p. 362.

11) G. R. Taylor, *op. cit.*, p. 179, V. S. Clark, *op. cit.*, p. 362.

12) Central Republic (Central American Confederation, 1823-1838)。現在の Guatemala, El Salvador, Honduras, Nicaragua, Costa Rica。

13) T. Pitkin, *op. cit.*, p. 227.

14) *ibid.*, p. 223.

第2表 国内製工業品輸出額(単位 = ドル)

年次 順位	1827			1828			1829		
1	綿製品	1,159,414	20.57%	綿製品	1,010,232	18.21%	綿製品	1,259,457	23.27%
2	石けん及び獣 脂ろうそく	901,751	16.00	石けん及び獣 脂ろうそく	912,322	16.44	石けん及び獣 脂ろうそく	692,691	12.80
3	木製品 ¹⁾	574,751	10.20	木製品 ¹⁾	611,196	11.01	木製品 ¹⁾	501,946	9.28
4	皮革製品	565,787	10.04	皮革製品	532,238	9.60	皮革製品	472,600	8.73
5	帽子	286,624	5.08	酒類	393,876	7.10	酒類	382,234	7.06
6	鉄	273,158	4.85	帽子	326,294	5.88	帽子	270,780	5.00
7	酒類	241,835	4.29	鉄	231,234	4.17	鉄	223,705	4.14
8	火薬	176,229	3.12	タバコ	210,747	3.80	タバコ	202,396	3.74
9	ろう	123,354	2.19	火薬	181,384	3.27	火薬	171,924	3.18
10	医薬品	119,390	2.12	既製服	143,253	2.58	医薬品	101,524	1.86
	その他	1,214,358	21.54	その他	995,578	17.94	その他	1,133,063	20.94
	計	5,636,651	100	計	5,548,354	100	計	5,412,320	100
	輸出総額ならびに 工業製品輸出額の%	57,621,096	9.78		49,742,869	11.15		54,865,757	9.86

1830			1831			1832			1833		
綿製品	1,318,183	24.77%	綿製品	1,126,313	22.14%	綿製品	1,229,574	24.34%	綿製品	2,532,517	38.62%
石けん及び獣 脂ろうそく	619,238	11.64	石けん及び獣 脂ろうそく	643,252	12.65	石けん及び獣 脂ろうそく	701,184	13.89	石けん及び獣 脂ろうそく	673,076	10.26
鉄製品 ²⁾	446,222	8.39	皮革製品	388,523	7.64	皮革製品	349,525	6.92	タバコ	288,973	4.41
皮革製品	309,473	5.82	帽子	353,013	6.94	帽子	310,912	6.16	皮革製品	284,828	4.34
帽子	309,362	5.81	タバコ	292,475	5.75	タバコ	295,771	5.86	帽子	243,271	3.71
木製品 ¹⁾	290,653	5.46	木製品	278,721	5.45	木製品	214,315	4.24	鉄製品 ¹⁾	233,812	3.57
酒類	275,155	5.17	鉄製品	233,641	4.59	既製品	212,830	4.21	木製品 ²⁾	229,465	3.50
タバコ	246,747	4.64	精糖	215,794	4.24	酒類	165,804	3.28	銅及び青銅	203,880	3.11
精糖	193,084	3.63	櫛・ボタン類	120,217	2.36	医薬品	130,238	2.58	ろう	178,748	2.73
ろう	153,666	2.89	医薬品	104,760	2.06	櫛・ボタン類	124,305	2.46	火薬	139,164	2.12
その他	1,159,197	21.78	その他	1,332,181	26.18	その他	1,316,375	26.06	その他	1,549,346	23.63
計	5,320,980	100	計	5,088,890	100	計	5,050,833	100	計	6,557,080	100
	58,215,586	9.14		58,503,272	8.70		61,373,348	8.23		69,209,309	9.47

出所: Timothy Pitkin, *A Statistical View of the Commerce of the United States*. New Haven, 1835, pp. 138-144, 117-118 から作製。
注: 1) 馬車及びその他の車を含む。2) 内容は、次の3種目からなる。1. Pig, bar and nail. 2. Castings. 3. all manufactures of.

第3表 輸出綿製品種別(単位 = ドル)

種 別	1827	1828	1829	1830	1831	1832	1833
プリント及び染色布	45,120	76,012	145,024	61,800	96,931	104,870	421,721
白布	951,001	887,628	981,370	964,196	947,932	1,052,891	1,802,116
ナンキン	14,750	5,147	1,878	1,093	2,397	341	2,054
綿糸	11,175	12,570	3,849	24,744	17,221	12,618	104,335
その他の綿製品	137,368	28,873	127,336	266,350	61,832	58,854	202,291
計	1,157,414	1,010,232	1,259,457	1,318,183	1,126,313	1,229,574	2,532,517

出所: Timothy Pitkin, *op. cit.*, pp. 138-144 から作製。

史上 Neutral and Carrying Trade が支配的であった時代である。この時期の Carrying Trade の内容は、基本的にはコーヒー、砂糖、茶、香料等の熱帯産物、その他をヨーロッパに再輸出し、ヨーロッパ製の工業品を西インド、中南米、アジア等に再輸出するものであった¹⁵⁾。

このような再輸出貿易は、植民地時代以来アメリカの商業資本によっておこなわれてきたものであり、この時期以後には、ヨーロッパへの農産物(主にカナダ小麦)の再輸出、中南米へのヨーロッパ製工業品の再輸出という

形でつづくのであるが、いずれも南北戦争前において、たとえば工業製品の再輸出は 1830 年代を、農産物のそれは 1854 年をピークとして減少し、以後その額もアメリカの商品貿易構造にしめる意義も減じていった¹⁶⁾。

ところで、この 1793 年から 1807 年にいたる時期の Carrying Trade において特徴的なことは、まず第 1 に、貿易額が全体として急激に拡大してゆくなかで、再輸出額が輸出額をきわめて大巾に上まわったこと¹⁷⁾。第 2 に

16) G. R. Taylor, *op. cit.*, pp. 178-182.

17) U. S. Department of Commerce, *Historical Statistics of the United States*, p. 538.

15) T. Pitkin, *op. cit.*, pp. 145, 150, 181; G. R. Taylor, *op. cit.*, pp. 178-179.

第4表 1802-4年(3年間平均額)の再輸出額と再輸出先(単位=ドル)

輸 出 額		輸 出 先	
従価税支払商品 ¹⁾	9,772,000	ヨーロッパ	20,648,000
コーヒー	7,302,000	西インド及びアメリカ植民地	6,688,000
砂糖	5,775,000	アジア, アフリカ, 南洋	1,197,000
綿花, 羊毛, インディゴ, 香料	2,490,000		
茶	1,304,000	計	28,533,000
ワイン	1,108,800		
酒類	642,000		
その他	140,000		
計	28,533,000		

出所: Timothy Pitkin, *op. cit.*, p. 174 から作製。

注: 1) 鉄製品, キャラコ等々 から人形, 造花にいたる迄の各種製造品。U. S. Senate, Committee on Finance, *The Existing Tariff on Imports into the U. S., Etc., and the Free List*. 48 the Congress 1st Session. Senate Report No. 12, pp. 124-130 参照。

アメリカの商業資本が、全世界の貿易の Carrier となったこと。従来、各重商主義体制下にあったヨーロッパ諸国とその植民地との間の貿易を独占的に代行したこと(西インド貿易)。さらには、プロシヤ、ロシアの工業製品にいたる迄のヨーロッパ製工業品、その他の貿易を独占したこと¹⁸⁾。第3に、われわれにとってより重要なことは、ヨーロッパ製工業品の中南米諸国への再輸出とならんで、この時期には、中国製・東インド製の「製造工業品」(綿製品)が中南米諸国に再輸出されていたということである。Nankeens という名称でしめされている中国製綿織物がそれであり、また、1816年以前の東インドからの輸入の大部分がそうであるといわれている、低価格の東インド製綿織物¹⁹⁾がそれである。たとえば、T. Pitkinによれば、例のアメリカ関税史上有名な、1816年関税法における 1 yd 25 cts という「minimum Price は、アメリカの綿織物業者ならびに綿花プランターの保護・奨励のために、アメリカ市場から低価格のインド綿製品を一掃するために設定された」²⁰⁾ものであるといわれているほどである²¹⁾。

周知のように、この極東との貿易は、独立直後から Boston の商業資本によって開始され、以後も主として同者によっておこなわれてゆき²²⁾、アメリカの貿易史上、さらにはアメリカ資本主義の発達にとっても一定の意義・

役割をもっていたのであるが²³⁾、その全体については一応別として、当面われわれにとって問題である中国ならびに東インドからの粗製綿製品の再輸出という貿易は、Embargo 以後、そして、すでにわれわれがみた 1827年以後におけるアメリカ製粗綿布の中南米諸国への輸出の増大とう時期以後においては、どのような経過をたどったのであろうか。中国製品については第5表がしめしているように、アメリカ商人によるカントンからの輸出額は 1820年をピークとして以後急速に減少している²⁴⁾、また東インド製品についていえば、T. Pitkinによれば、1816年関税の minimum valuation principle はその目的を達し、その結果「以後、同品目は、ほとんどアメリカに輸入されなかった」²⁵⁾という。

要する。1816年関税法の「最低額評価法」は、1812年戦争後におけるイギリス工業品の大量流入に対処するもであったとするのが従来の説明である(D. R. Dewey, *Financial History of the United States*, pp. 161-162; Ugo Rabbeno, *The American Commercial Policy*, pp. 153-156; E. Stanwood, *American Tariff Controversies in the Nineteenth Century*, Vol. I. p. 131. 平出宜道『近代資本主義成立史論』p. 322.) T. Pitkinと同様の記述は、O. L. Elliottによってもなされている。「インドの安価な綿製品は(輸入)禁止されるべきであり、また世界の他の部分からの粗質織物(Coarse texture)にたいする関税は引き上げられるべきであるということが提案されていた。」(O. L. Elliott, *The Tariff Controversy in the United States, 1789-1833*, p. 166)。なお、V. S. Clarkは、「初期には(1815年以前を指す—引用者)東インドおよびイギリスの粗質布 plain cloths がアメリカ市場を支配していた」とのべている(V. S. Clark, *op. cit.*, Vol. I, p. 249.)、Taussigは、海外(abroad)との競争、あるいは、外国工業(foreign manufactures)との競争とのみ記していて明確でない(F. A. Taussig, *The Tariff History of the United States*, ch. III.)

22) T. Pitkin, *op. cit.*, p. 251.; R. A. East, *Business Enterprise in the American Revolutionary Era*, p. 256

23) 「このような新らたな、通例、利潤の多い世界的な貿易のもっとも重要な結果は、当時の言葉にしたがえば、“that the mean of investment were facilitated so as to secure the future extention of the trade”であり、そうすることによって同時にその貿易は、その時代の他の事実の確立のための基礎をもおいたのである。2世紀にわたるイギリス資本主義の拡大の物語が同様なものであった。」(R. A. East, *op. cit.*, pp. 256-257.)。なお、この中国貿易の利潤は、その大部分が再輸出によるものであり(T. Pitkin, *op. cit.*, pp. 254.)、その率は 20-25% であった(*ibid.*, R. A. East, *op. cit.*, pp. 254.)。

18) T. Pitkin, *op. cit.*, Ch. VI, とくに, pp. 145, 150, 218, 221, 231, 236-7, 242, 246; V. S. Clark, *op. cit.*, p. 238; E. R. Johnson and others, *op. cit.*, Vol. II, pp. 27-28.

19) T. Pitkin, *ibid.*, p. 188, E. R. Johnson and others, *op. cit.*, Vol. II, pp. 25-26.

20) T. Pitkin, *op. cit.*, pp. 188-189.

21) この点についての T. Pitkin の指摘は検討を

第5表 アメリカ商人によるカントンからの輸出額(1818-1827年)(単位=ドル)

6月30日現在	輸 出 品 名							計
	絹織物	ナンキン	陶器	茶	桂皮	砂糖	その他	
1818	2,239,260	734,500	172,305	3,290,439	72,716	89,377	178,745	6,777,342
1819	3,842,412	1,099,392	44,964	3,472,534	141,064	304,157	152,510	9,057,033
1820 ¹⁾	2,909,463	1,407,360	34,944	3,029,015	80,556	343,237	368,532	8,173,107
1821	1,702,770	402,500	12,563	2,437,990	68,922	21,560	69,391	4,715,696
1822	3,172,562	904,332	12,694	2,755,830	125,928	139,743	452,555	7,563,644
1823	3,104,786	614,413	11,016	3,071,018	195,592	22,385	504,282	7,523,492
1824	1,828,094	181,138	4,045	3,217,645	175,384	5,000	265,848	5,677,149
1825	3,035,494	360,060	10,970	4,584,872	206,536	28,117	275,070	8,501,119
1826	2,987,517	500,950	28,230	4,485,788	221,459	188,879	339,739	8,572,562
1827	1,806,476	216,107	9,961	2,128,353	73,850	37,940	156,740	4,429,377

出所: Timothy Pitkin, *op. cit.*, p. 305 から作製。注: 1) 推定額

他方、1820年以後における Nankeens 輸入減少とは逆に、カントンにたいするアメリカ綿製品の輸出は、同貿易の輸出総額は減少してゆくなかで(たとえば、1821年 4,290,560 ドルから、1833年の 1,433,759 ドル)、次第に増大し、1833年には 215,495 ドルにたった²⁴⁾。

IV 以上、1820年代後半におけるアメリカ製粗製綿布の輸出と、中国製・東インド製綿布の再輸出の動向をたどってきた。それらの諸事実から次のようなことを要約しよう。

(1) アメリカの貿易において、いわゆる「二重構造」の原型となる自国製工業品のより後進的な地域への輸出は、1820年代後半、おそくとも 1827年に——まさに、イギリス綿工業にとって「1815-1830年には、ヨーロッパ大陸および合衆国との競争がはじまった」²⁷⁾という時点に、粗製綿布という商品を素材として形成された。

(2) そのさい、アメリカ製工業品=粗製綿布の輸出市場となったのは、メキシコ等のより後進的な中南米諸国であって、従来からヨーロッパ諸国によってその工業製品の市場として把握されていた西インド諸島等は、アメリカ製綿布の輸出市場とはなりえなかった。

(3) しかし、このいわゆる「二重構造」の原型となる貿易構造は、1820年代のアメリカ製綿布の登場によって、はじめてアメリカの貿易にあらわれたのではなく、それは 1793年から 1807年にいたる時期のアメリカ貿

易を特徴づけた Neutral and Carrying Trade の時代のヨーロッパ製工業品ならびに中国・東インド製綿布の中南米諸国への再輸出という貿易構造にとってかわったものである。この貿易構造の内容が、アメリカ自身の工業製品=綿製品によってかえられる時点が 1820年代後半(1827年)である。カントンからの Nankeens 輸入の激減と、それとは逆にカントンへのアメリカ製綿織物輸出の増大が、この転換を表現するものである。

(4) 以上の一連の事実、ならびに 1830年以後においては、中南米・中国へのイギリス製綿製品の再輸出もアメリカ製綿製品輸出に転換されていった²⁸⁾ということは、他方、1828年の関税において綿工業はすでに「最低額評価法」を必要とせず、むしろそれを要求したのは毛織物工業であったということ²⁹⁾とあわせて、この 1820年代後半におけるアメリカ綿工業の成熟の度合——粗製綿織物=大衆の衣料必需品の生産においては、もはやイギリス綿工業との競争にたいして国内においても、さらには米大陸中国という一定の地域においては耐えうる程度にまで成熟したことをしめすものであろう。

(6) 粗製綿布がアメリカ工業品の輸出をになうものであったということは、イギリス綿工業に比較してアメリカのその後進性ということよりも、むしろ V. S. Clark も指摘しているように、アメリカの工業生産が本来、国内需要のためのものであって、輸出用としての生産よりは、国内需要の剰余が輸出された³⁰⁾ということ、さらにはアメリカの工業生産を特徴づける他の性格、大衆の生活必需資料の大量的生産ということによるものであろう。

24) この時期のアメリカの対中国貿易の形態には、アメリカとカントンとの direct trade と American account と称するアメリカ商人によるカントンと世界各地との貿易とがあった。本文の表は、この後者のものであるが、前者の形態での貿易においても事態は同様であった(T. Pitkin, *op. cit.*, p. 301. 参照)。

25) T. Pitkin, pp. 188-189.

26) *ibid.*, p. 248.

27) マルクス『資本論』第1巻第4編第13章(青木文庫版第3分冊)735頁。

28) G. R. Taylor, *op. cit.*, p. 179. なお、アジア製綿布の駆逐については他方、外的な条件として(イギリス綿工業によって)「1833年以来、アジア市場の拡張が『人種の破壊』によって強行された」(『資本論』前掲 735-736頁)ということも見落されてはならない。

29) F. W. Taussig, *op. cit.*, Chs. I. II 参照。

30) V. S. Clark, *op. cit.*, pp. 361-362.